

11月 関根先生講演会 参加者の皆さんからのご質問に対する関根先生からの回答

- ① 「親に視点の変換を求める」乳幼児教育相談担当として常にそのタイミングを含めて葛藤する部分です。聴覚活用の可能性を求めながら、視点の変換をも求めることはやはり不可能なことなのでしょうか。

➡ ご質問、有難うございます。聞こえない子の立場に立つ。私たちは聞こえるので本当に難しいですよ。

聞こえる保護者はどんな方でもやはり最初は聴覚活用の可能性を仰います。私はきちんとレポートが取れるまでその考えを尊重しています。

例えば、小さなことでは、最初保護者とお子さんについて話すとき、保護者の様子を見て「聞こえにくい子」という言い方をあえて使い、「聞こえない子」とは言わないようにすることもあります。でも、保護者と私との信頼関係が築かれ、保護者が聞こえないとはどういうことかをグループ活動や保護者講座で学び、だんだんと理解してくれるようになった頃合いを見て、個々の保護者に対して聴力に関係なく「(おさんは) 聞こえない」という言葉を使うようにしています。

そして、聞こえない子にとっての言語は手話であり、音声はオプションであること。子どもにどれだけ音声を求めるかは保護者が決めることではなく、子どもが決めることであるということを少しずつ伝えていきます。

三つ子の魂百までというお話をしましたが、愛着関係は聴覚口話のみで育てた場合、聞こえる子のコミュニケーション体験では成立しない恐れがあると思います。そういうことも親御さんには伝えるようにしていきます。

親の中に深い障害認識と障害理解が育つようにあの手この手でアプローチをすることで、聴覚活用の可能性を求めながら聞こえない子の立場に立つということは不可能ではないと思いますが、私たち聞こえる担当者も常に聞こえない世界を想像するという意識を求められ、聞こえに引きずられないという姿勢、深い障害認識と障害理解が大事になってくるのかな、と思います。

- ② 先生が現在、大塚ろう学校で子どもやその保護者と接する中で困難を感じていることがおありになれば、伺いたいと思いました。

➡ 困難を感じていることはあるか。最近とても感じるのは、このコロナの影響なのかも知れませんが、産後うつなどメンタル面での病気を抱えている方が多いな、と思っています。そういうお母さんの場合、なかなか学校に来られない場合が多いです。そういうお母さんの場合、お子さんを生まれてすぐから福祉園や保育園に預けていらっしゃるかたが多く、そういう施設の先生方との連携が大切になってきています。

- ③ 最近、「聞こえない子には日本手話を。対应手話は手話ではない」という主張がよく聞かれます。子どもに対して、声と一緒につかうので、どうしても対应手話よりになります(もちろん自分の手話レベルがまだまだ

なのもありますが)。先生のお話を聞くと、手話を使うことに意味があり、日本手話であることにこだわる必要はないのかなと感じたのですが、先生はどうお考えですか？

➡日本手話を！という主張が聞かれますよね。私は子どもととにかく通じ合えば良いと思っていますので、日本手話じゃないと！という考えはありません。南村先生もおっしゃっていましたが、言語に「正しい」はないと思うのです。

ろう者の方でも多分、これが正しい日本手話です、と言える方っていないのではないかなあと。私事で考えると、これが正しい日本語です、と言えるかと言えば、私の日本語はかなり崩れていると思います。

聞こえない子の9割は聞こえる両親から生まれるので、聞こえる両親が日本手話を堪能に使えるようになるのは大変なことだろうと思いますし、生まれてすぐリファーマと言われた聞こえる両親に、「日本手話で話しかける」ことを求めるのは難しいし、音声を全く切って会話するということを聞こえる両親に最初から求めるのは不安を倍増させるだけなのではないかと思います。

「仕草・目線・表情・指差し・写真カード・実物・手話（日本手話でも対応手話でも）・ジェスチャーなど」も全てことばです。「心がのってれば」、それがことばだと思っています。

それから、子ども達は柔軟ですよ。日本語対応手話で育っていったとしても、学校の子も達を見ていると、様々なコミュニケーションモード（日本手話、日本語対応手話、音声を使える子は音声）を使って会話をしている様子が見られます

④重度難聴とダウン症の重複幼児の保護者です。医療機関での言語と摂食リハビリに通っていますが、手話の使用は今のところありません。難聴とのケースが少なく、担当 ST も試行錯誤してくださっているところです。PECS コミュニケーションを教わっているところです。先生は、重複児に対する言語リハビリはどうされていますか。ダウン症児は視覚的に捉えることに優れていて発語が苦手な場合が多いとされていますが、手話の理解や習得にはどういう印象をお持ちでしょうか。保護者としては、どう心がけ、工夫すればいいでしょうか。

➡手話を使ってあげてください。アメリカのダウン症の療育では聞こえるダウン症のお子さん達にもジェスチャーや手話を使っていると聞いたことがあります。フランスでは聞こえる保育園児に手話と音声で語りかけているというニュースが以前放送されていました。

PECS とは抽象的な絵カードを用いたコミュニケーション支援ですかね？お子さんはそのカードの内容を理解できていますか？子どもにとって一番わかりやすいのは実物、その後、写真カード、その後抽象的な絵カードという風に、理解するにも発達順序があります。

また、重複障害があろうとなかろうと、最初の支援はどんな子どもにとっても同じだと考えています。私のところに来ていた重度難聴ダウン症児 A ちゃん。今、4歳児ですが、まだ歩行未完成です。0歳児の時に私が担当していました。お母さんはとても丁寧に接していました。オムツを替える時には必ずオムツを見せて、目を合わせてから「替えるよ」と手話と音声で伝え、替えていました。お子さんが何を伝えたいのか、その表情や仕草で読み取ることが上手なお母さんでもありました。丁寧な関わりをず

っと続けてきたある日、1歳児クラスになった頃だったかなあ。お母さんの手話を真似するようになってきたのです。ひよこ組ではいつも体操をするのですが、「体操」と手話をすると、同じように手を動かすようになりました。そして今は、2語文くらいで会話が成立すると聞いています。

今、0歳児クラスに来ている重度難聴ダウン症児B君。もうすぐ1歳。まだ首座りも未完成です。このお母さんもとても丁寧にお子さんに接しています。先日個別の時に、この子がクチュクチュと唇を動かしているのので、「これはなんだろう？」とお母さんにきくと、「遊んでいるのだと思います」との答え。でもさっきまではやっていなかったのので、「もしかしたらミルクが欲しいのじゃない？」とお母さんに伝えると、「え？まだ時間じゃない。そうなのかな」ということでしたが、お母さんが半信半疑でミルクを与えてみるとすごい飲みっぷり！やっぱり訴えていたんだね～とお母さんと大笑い。それからこのお母さんはこの子の様子をよく観察するようになりました。するとやはりお腹が空いている時に唇をクチュクチュしてお母さんに伝えていることが判明しました。（このように、私たち周囲の大人が良い受け手であることが大事です）

お母さんはミルクをあげる時、ミルクを作る過程を全てこの子に見せながら「ミルク ほしいね」「ミルク 作るね」「まってね」など手話を見せています。そういう関わりを続けて2ヶ月。昨日のグループで、ミルクを飲み終わった後に、飲み足りなくてクチュクチュしているこの子に、お母さんは空の瓶を見せながら「おしまいね」と手話を使って話しかけると、クチュクチュが止まりました。お母さんに聞くと「おしまい」がわかっているとのことでした。

言葉はコミュニケーションの中で育ちます。特別なことをやる必要はないのです。

日々の生活の一コマでも良い。毎日繰り返していることを丁寧に関わりながら、丁寧にコミュニケーションをとりながら関わってあげることが大切であると思います。信じて接してみてください。

Instagramのblw_a_taroさんは私が0歳児の時にみていたダウン症の男の子です。結局聞こえていたのでろう学校は終了になりましたが、1歳後半くらいから手話での表出がどんどん出てきた様子が書かれています。今でもお母さんは手話と音声で語りかけています。